

# ヨロツパの旅

平井信義

私は友人たちの家庭に招かれると、そこに子どもがいる場合には、必ず、子ども部屋を見せてもらった。ヘーベルス君の家でも、ボッシュ君の家でも、子どもたちの部屋に入って、寝巻姿の子どもたちと握手を交したものである。

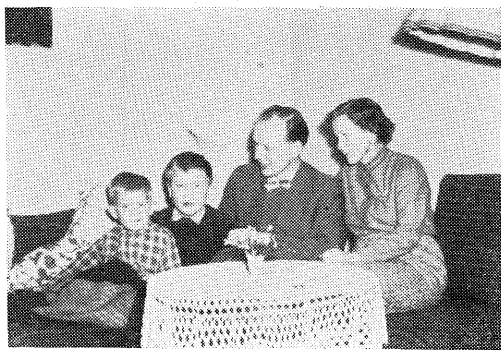
友人たちの家に招かれるのは、多く夜であった。夜の招待は、八時頃から始まる。殊に病院勤務者の多くは、夕方四時乃至五時から七時まで勤務があるので、勤めから帰って落付くのはどうしても八時頃となる。

ついでに病院での一日の勤務時間を言えば、午前八時から午後一時までで、その後四時乃至五時までは昼休みである。これは小児科の病院に限らない。大抵の大学病院では、昼寝ひるねの時間がじゅうぶん

にとつてあつた。だから、その時間に大学を訪問しても、当直医しか残っていないのが普通であるし、それも用のない時には当直室で昼寝をしている。そのドアの把手に「只今午睡中。妨げる勿れ」という札がぶら下つている。当然鍵もかけてあるから、無理に会いたいと願うわけにはいかない。

午前の勤務を終えて別れる時に、直訳すれば「よいお昼寝を」とか「美しいお昼寝を」といって別れるのは、今もなつかしい思い出である。私も下宿へ帰って食事をすますと、美しい午睡の夢を結ぶことがしばしばであつた。

そのような日課であるから、夕方の招待は八時から深更に及ぶ。初めての時、歓談が十一時頃になつても終らないので「もうあまり遅



いから失礼します」といったら、「どうして、どうして、ドイツではまだ早いのですよ」と言われて再び腰を据えたものである。そして、多くは十二時過ぎまたは一時まで続く。

こうした深更までの応接に、子どもが出ることは全くない。私の行く頃には、もう子ども部屋で、ベッドの中心にいられてしまう。私が初めていった家庭では「日本人が来た」という好奇心で、応接室へのぞぎに来る子どももあったが、母親に叱られてしまった。私はそんな時、「子どもの部屋を見せていただいでいいでしょうか？」ときく。すると、両親は喜んで案内してくれるし、子どもたちも大喜びであった。

ヘーベルス君は二人の男の子の親である。その子ども部屋は、約八畳もあったろうか。戸口から左右の壁に密着して男の子二人のベッドがおかれていた。ベッドはおとなのものより低く、マットを敷

いた高さは私の膝ほどであった。

見ると蒲団の下から、五つになる弟の方が、丸い青い目をくりくり見上げながら私の方をおそるおそる眺めている。東夷オシロイをはじめて見たのであろう。私は近寄って、その子の顔にかがみ込んだ。

「お名前何ていうの？」

ときくと、その子は更に蒲団の奥へもぐるようにした。線の細い子どもである。すると、左側のベッドから兄のクリストフが

「ハンス(Hans)」

と、大声でいった。その声に勇気付けられて、ハンスは蒲団からすっかり顔を出すと、

「ハンスちゃんだよ(Hanschen)」と威張った言い方で答えた。

私は、ポケットから『こけし』の人形を出して、

「さあ、日本からの贈物だよ」

と、小さく枕元に出した手の平に握らせた。

「日本から？ 何だろう」

と彼は起上った。

「玩具だよ。人形。これが坊やで、こっちがお嬢さん……」

ハンスは、なかないものを手にした驚きと、怪しみとで、丸い目を一層丸くして見入っている。兄のクリストフは、パジャマのままベッドの上に立上り、背伸びをして、弟への贈物を見ている。弟と同じように、訝りながら、半ば羨しそうな顔である。そこへ、母親

が再び入って来た。

「まあ、素晴らしいじゃない。ハンスちゃん。しかし、ありがとうは？」

その時、初めて気がついたように、ハンスは「ダンケゼア（有難う）」といった。

待ち構えているクリストフの、ベッドの裾に坐を移して、私は内ポケットを探った。クリストフは、何が出て来るかと待ち焦がれている。私が手にしたものは、セロファン紙につつんだものであった。

「まあ、クリストフ！ お前にもよ！」——と母親が大仰に声をあげた。クリストフは、喚声をあげるのも惜しいように、指先を繰り返しながら、セロファン紙をひろげた。

「切手だ。これ、日本の切手？」

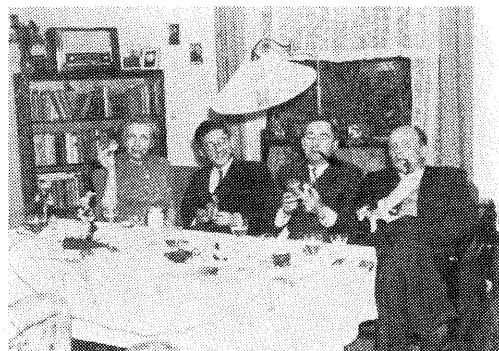
「そうだと。一枚々々見てごらん」

クリストフは切手の蒐集家だ。ベッドの白い布の波の上に、彼は大切そうにそれらを並べ始めた。

「これ何の絵？」

そこには、錦代橋や、日本アルプスや、わが国の国立公園のものが並べられた。十枚余りの切手図案について、次々と質問をうける。

「日本にもアルプスがあるの？」



「英国人がこの山脈を見て名付けたのだよ。ヨーロッパのアルプスによく似ているのだからね」

私の知識は曖昧であったが、それでもクリストフは満足がいったようであった。母親は私以外の客の応接にも忙しかったが、三度入って来て、

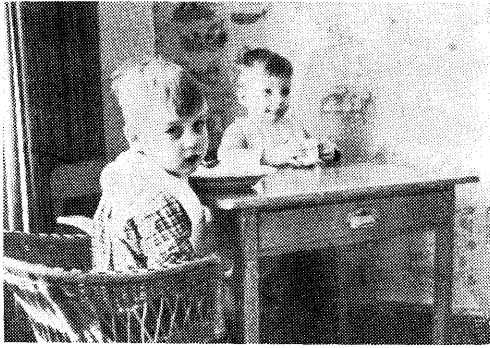
「クリストフ、いい贈物をもらったのね、切手帳がいっぱいになるじゃないの」

といった。クリストフは、明日友だちにそれを見せる喜びに、胸を躍らせながらベッドから飛降りると、小走りに抽出しから小型の切手帳を取出してそれにはさんだ。

子どもたちがそれぞれの贈物を眺めている間に私は部屋の中を見廻した。子どもたちが寝ているベッドは、非常に粗末であった。まわりのわくこそあれ、装飾なども極く単純であったし、それに塗ってあるニスなどは、非常にうすく、むしろ白木とさえ思えるほどであった。それに掛蒲団の覆いが白く輝いているのみで、その他の調

度と言えば、クリストフの机と玩具などを入れた戸棚、窓掛などであったから、何かガランとした感じがした。

ヘーベルス君は大学の講師だから、いわゆる知識階級に属する人であり、経済的にいっても中流に属するはずである。しかも、自分たちの部屋とか応接間は、壁紙といい、電気スタンドといい、ソファ―その他の調度が、彼ら夫婦の好みを表現しているように、いろいろ工夫されている。ところが、子ども部屋には、そうした配慮がおこなわれていないように思えたのである。



ボッシュ君の家の子ども部屋

屋に入った時にも、同じような感じがした。細長い部屋に、三人の子どものベッドが左右の壁に沿っておかれてあり、私が入っていくと、三人とも握手を求めて蒲団の中から起き上ったのであるが、高い天井が気になるくらい、無趣味であった。

子どもに与える部屋が、こういうした淡白なものであってよいだろうか。私は、帰り道を

ふみしめながら考えたものであった。そんな時に、いつも思い出すのは、我が国のフレール館で売っている白木の汽車の玩具であった。それには、車輪もついていない程簡単なもので、誰が考案したのか知らない。今でも売っているはずである。それを、私自身子どもたちに与えた時のありさまは、今でも目に映じてくる。それぞれの子どもたちは、白木の汽車の上思い思いの色を使って、それに採色して倦きなかった。創る喜びは、むしろ、こうした生地に面した時に強く養われるのではないだろうか――私はしみじみ感じたものである。

近年、子ども部屋にはずい分立派なものを散見する。幼稚園などでも、色彩、調度などにもずい分凝ったものが工夫されている。たしかに、そうしたものが子どもを思っで与えられているには違いない。確かに美的教育のためとか能率を教えるためによい教育のためとか、いろいろの理屈はつくにちがいない。それらが、新しい試みであるだけに、何か進歩的なこと、理想に近い環境を与えることのように見える。

しかし、一歩立入ってこうしたものを与えることが、本当に子どものためになっているのだろうか、と考えてみると、何か疑惑がわいてくるのである。

子どもに、白木のままのベッドを与え、工夫を凝らさない床を与え、あるいは軋むような戸棚を与えることが、その子どもの性格の

発達や、あるいは美的見識や、或いは健康によくないことなのだろうか。そうならば、農山漁村の家庭に育てられている子どもと、都市の裕福な家庭に育てられている子どもとくらべて、前者が非常に大きな不幸を背負っていることになるし、アメリカの子どもにくらべてわが国の子どもが不幸であるはずである。

勿論、わが国の農村などの住宅には、子どものスペースを与えていないし、電灯が暗かったり、便所が不潔であったり、台所がきたなかったり、改善すべきところは多々ある。しかしながら、それは基本的な生活態度の限度で言われるべきで、色彩を与え、便利な調度を与えることとは筋道がちがってはいないだろうか。

これを考える時にも思い出すのは、ドイツの精神医学者たちと、近代文明の方向について語り合ったときのことである。

「一体、人間社会において、能率という考え方を中心に器械化が人間の生活を進歩させているとしたら、今後の家庭内での器械化は、どのような結果を招くでしょう？」

ある会合でこのような発言がおこなわれたことがあった。私は立上った。

「恐らく、近い将来に、『育児の器械』が出るに違いありません。母親はベッドの中でボタンを押せば、ロボットが赤ん坊の寝床の傍にいて、おむつをかえ、授乳をするでしょう。それも、出来るだけ母性的行動が出来るように仕組まれるでしょう。子どもたちも、

ボタン一つ押せば、生活習慣のつき易い器械装置の中で生活することになりはしないでしょうか。」

この発言に、そこに集っている友人たちは大きな声で、腹の底から出る笑いを発したが、急にしずまって、グルムシュタットから来た医者 of 発言に耳を傾けた。

「確かに、近代文明、器械文明は、人間が創造したものでありながら、人間生活から創造力を奪う働きを持っていると同時に、人間と人間の近密な接触が不要になる方向に動いている。私は飛行機が頭の上を飛んでいる時に、しばしば思うのです。飛行機がこの世の中に出来たことが、一人ひとりの人間の精神生活をどのように深めたかということ……。私どもは、近代文明の方向については、細心の注意をはらって見守る必要があるということですよ。」

彼の能弁は、なおしばらく続いていた。それを追いながら、私は、三十年後の世界がどうなっているだろうか。その時の、人間存在の意義は、どのようなものになるのだろうか。母と子の在り方、先生と子どもの在り方は、どのように変っているだろうかということを考えていた。

×

×

×